

**BEAUTIFYING AND WHITENING SKIN PREPARATION FOR EXTERNAL USE**

Patent number: JP8012561  
Publication date: 1996-01-16  
Inventor: KOMAZAKI HISAYUKI; SHIBATA YUKI; YAGI  
EIICHIRO; NAGANUMA MASAKO; FUKUDA MINORU  
Applicant: SHISEIDO CO LTD  
Classification:  
- international: A61K7/48; A61K7/00; A61K35/78  
- european:  
Application number: JP19940168687 19940629  
Priority number(s): JP19940168687 19940629

Ref. 13

Report a data error here

**Abstract of JP8012561**

**PURPOSE:**To obtain the subject preparation for external use, having suppressing actions on melanogenesis and inhibiting actions on tyrosinase activities, excellent in lightening of the color, beautifying and whitening of pigmentation, dermal stains, ephelides, chloasmata, etc., after sunburn, excellent in safety and useful as an ointment, a cream, etc., by blending an extract of Arnica therein.  
**CONSTITUTION:**This skin preparation for external use is obtained by blending 0.005-20.0wt.%, preferably 0.01-10.0wt.% extract of Arnica (botanical name: Senecio Canescens Cuatr). Furthermore, the Arnica is a plant growing in an arid grassland, a pasture, etc., in South America, especially the Andes, etc. For example, an extract prepared by immersing a leaf and a stem or a fruit, etc., of the Arnica or the whole herb thereof in an extracting solvent such as ethanol or refluxing the solvent together with the leaf, etc., therein under heating, filtering the resultant extract solution, concentrating the prepared filtrate, etc., is preferably used as the extract.

---

Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide**TEST AVAILABLE COPY**

【物件名】

刊行物 13

刊行物 13

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平8-12561

(43) 公開日 平成8年(1996)1月16日

(51) Int. Cl. <sup>6</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
A 6 1 K	7/48			
	7/00	X		
		K		
35/78	ADA C	8217-4 C		
審査請求	未請求	請求項の数 2	F D	(全 7 頁)

(21) 出願番号 特願平6-168687

(22) 出願日 平成6年(1994)6月29日

(71) 出願人 000001959

株式会社資生堂  
東京都中央区銀座7丁目5番5号

(72) 発明者 駒崎 久幸

神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株  
式会社資生堂第一リサーチセンター内

(72) 発明者 芝田 由記

神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株  
式会社資生堂第一リサーチセンター内

(72) 発明者 八木 栄一郎

神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株  
式会社資生堂第一リサーチセンター内

(74) 代理人 弁理士 館野 千恵子

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 美白用皮膚外用剤

【添付書類】

(57) 【要約】

【目的】 日焼け後の色素沈着・しみ・そばかす・肝斑等の淡色化、美白に優れた効果を有すると共に、安全性にも優れた美白用皮膚外用剤を提供する。

【構成】 アルニカ (Arnica、学名: Senecio Causcens Cuatr) の抽出物を配合する美白用皮膚外用剤。

7  127

(2)

特開平8-12561

1

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 アルニカ（*Arnica*、学名：*Senecio Canescens Cuatr*）の抽出物を配合することを特徴とする美白用皮膚外用剤。

【請求項2】 アルニカの抽出物の配合量が0.005～20.0重量%である請求項1記載の美白用皮膚外用剤。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】 本発明はアルニカ（*Arnica*）の抽出物を配合する事により、メラニンの生成を抑制し、日焼け後の色素沈着・しみ・そばかす・肝斑等の予防および改善に有効な美白用皮膚外用剤に関する。

## 【0002】

【従来の技術】 皮膚のしみなどの発生機序については一部不明な点もあるが、一般には、ホルモンの異常や日光からの紫外線の刺激が原因となつてメラニン色素が形成され、これが皮膚内に異常沈着するものと考えられている。皮膚の着色の原因となるこのメラニン色素は、表皮と真皮との間にあるメラニン細胞（メラノサイト）内のメラニン生成顆粒（メラノソーム）において生産され、生成したメラニンは、浸透作用により隣接細胞へ拡散する。このメラノサイト内における生化学反応は、次のようなものと推定されている。すなわち、必須アミノ酸であるチロシンが酵素チロシナーゼの作用によりドーパキノンとなり、これが酵素的または非酵素的酸化作用により赤色色素および無色色素を経て黒色のメラニンへ変化する過程がメラニン色素の生成過程である。従つて、反応の第1段階であるチロシナーゼの作用を抑制することが、メラニン生成の抑制に重要である。

## 【0003】

【発明が解決しようとする課題】 しかしチロシナーゼ作用を抑制する化合物はハイドロキノンを除いてはその効果の発現がきわめて緩慢であるため、皮膚色素沈着の改善効果が十分でない。一方、ハイドロキノンは効果は一応認められているが、感作性があるため、一般には使用が制限されている。そこでその安全性を向上させるため、高級脂肪酸のモノエステルやアルキルモノエーテルなどにする試み（特開昭58-154507号公報）がなされているが、エステル類は体内の加水分解酵素によって分解されるため必ずしも安全とはいいがたく、またエーテル類も安全性の面で充分に満足するものが得られていない。

## 【0004】

【課題を解決するための手段】 そこで本発明者らはこれらの問題を解決するものとして広々種々の物質についてメラニン生成抑制効果を調べた結果、アルニカ（*Arnica*、学名：*Senecio Canescens Cuatr*）の抽出物がメラニン生成抑制作用およびチロシナーゼ阻害作用を有していることを見出し、本発明を完成するに至った。

2

アルニカ（*Arnica*）の抽出物のメラニン生成抑制作用等に関する報告はこれまでになく、美白剤への応用も全く知られていない。本発明者らは上記知見に基づいて本発明を完成するに至った。

【0005】 すなわち本発明は、アルニカ（*Arnica*、学名：*Senecio Canescens Cuatr*）の抽出物を配合することを特徴とする美白用皮膚外用剤である。

【0006】 以下、本発明の構成について詳述する。本発明に用いられるアルニカ（*Arnica*）は、南アメリカ、特にアンデスなどの乾性草原、牧草などに生える植物である。本発明に用いられる抽出物は上記、葉と茎または果実等、アルニカ全草を抽出溶媒と共に浸漬または加熱還流した後、濾過し、濃縮して得られる。本発明に用いられる抽出溶媒は、通常抽出に用いられる溶媒であれば何でもよく、特にメタノール、エタノール等のアルコール類、含水アルコール類、アセトン、酢酸エチルエステル等の有機溶媒を単独あるいは組み合わせて用いることができる。

【0007】 本発明におけるアルニカ抽出物の配合量は、外用剤全量中、乾燥物として0.005～20.0重量%、好ましくは0.01～10.0重量%である。0.005重量%未満であると、本発明でいう効果が十分に発揮されず、20.0重量%を超えると製剤化が難しいので好ましくない。また、10.0重量%以上配合してもさほど大きな効果の向上はみられない。

【0008】 また、本発明の美白用皮膚外用剤には、上記必須成分以外に、通常化粧品や医薬品等の皮膚外用剤に用いられる成分、例えば、その他の美白剤、保湿剤、酸化防止剤、油性成分、紫外線吸収剤、界面活性剤、増粘剤、アルコール類、粉末成分、色材、水性成分、水、各種皮膚栄養剤等を必要に応じて適宜配合することができる。

【0009】 その他、エデト酸二ナトリウム、エデト酸三ナトリウム、クエン酸ナトリウム、ポリリン酸ナトリウム、メタリン酸ナトリウム、グルコン酸等の金属封鎖剤、カフェイン、タンニン、ペラバミル、トラネキサム酸およびその誘導体、甘草抽出物、グラブリジン、火棘の果実の煎水抽出物、各種生薬、酢酸トコフェロール、グリチルリチン酸およびその誘導体またはその塩等の薬剤、ビタミンC、アスコルビン酸リン酸マグネシウム、アスコルビン酸グルコシド、アルブチン、コウジ酸等の他の美白剤、グルコース、フルクトース、マンノース、ショ糖、トレハロース等の糖類なども適宜配合することができる。

【0010】 本発明の美白用皮膚外用剤とは、例えば軟膏、クリーム、乳液、ローション、パック、浴用剤等、従来皮膚外用剤に用いるものであればいずれでもよく、剤型は特に問わない。

## 【0011】

【実施例】 次に実施例によって本発明をさらに詳細に説

(3)

特開平8-12561

3

明する。尚、本発明はこれにより限定されるものではない。配合量は重量%である。実施例に先立ち、本発明の植物抽出物のメラニン抑制効果、チロシナーゼ活性阻害効果および美白効果に関する試験方法とその結果について説明する。

#### 【0012】試験方法およびその結果

##### 1. 試料の調製

アルニカ (Arnica) の茎および枝部分50gを、室温で1週間エタノールに浸漬し、抽出液を濃縮し、エタノール抽出物5.2gを得た。この抽出物をDMSO

##### 【0013】2. 細胞培養法

マウス由来のB16メラノーマ培養細胞を使用した。10%FBSおよびテオフィリン (0.09mg/ml) を含むイーグルMEM培地中でCO<sub>2</sub>インキュベーター (95%空気, 5%二酸化炭素) 内、37℃の条件下で培養した。培養24時間後に試料溶液を最終濃度 (抽出乾燥物換算濃度) で10<sup>-6</sup>~10<sup>-8</sup>重量%になるように添加し、さらに3日間培養を続け、以下の方法でメラニン

##### 【0014】3. メラニン量の視感測定

ウェルのプレートの蓋の上に拡散板を置き、倒立顕微鏡で細胞内のメラニン量を観察し、アルニカ抽出物を添加していない試料 (基準) の場合と比較した。その結果を表1に表示した。また、参考例として、すでにメラニン生成抑制作用のあることが知られているケイガイ (シソ科オドリコソウ亜科) 抽出物についても上記と同様の試\*

4

\*験を行った。その結果を併せて表1に示す。また表中、毒性とあるのは、細胞毒性のあることを示す。

##### 【0015】<判定基準>

○: 白 (メラニン量)

△: やや白 (メラニン量)

×: 基準 (メラニン量)

##### 【0016】4. チロシナーゼ活性の測定

測定前にウェル中の培地は除去し、PBS100μlで2回洗う。各ウェルに45μlの1%トライトン-X (ローム・アンド・ハース社製商品名、界面活性剤) を含むPBSを加える。1分間プレートを振動させ、よく細胞膜を破壊し、マイクロプレートリーダーで475nmの吸光度を測定してこれを0分時の吸光度とした。その後、すばやく5μlの10mMのL-DOPA溶液を加えて、37℃のインキュベーターに移し、60分間反応させた。1分間プレートを振動させ、60分時の吸光度 (475nm) を測定した。アルニカ抽出物を添加していない試料 (コントロール) の場合の0分時と60分時の吸光度差に対するアルニカ抽出物添加試料の前記吸光度差の減少分をチロシナーゼ活性阻害率 (%) とした。その結果を表1に示す。また、参考例として、すでにチロシナーゼ活性阻害作用のあることが知られているケイガイのエタノール抽出物についても上記と同様の試験を行った。その結果を併せて表1に示す。なお、表中、毒性とあるのは、細胞毒性が認められたことを示し、一は、コントロールに比べて、危険率5%以内で有意な差が認められなかったことを意味する。

##### 【0017】

##### 【表1】

試験	メラニン生成視感評価								チロシナーゼ活性阻害率 (%)	
	濃度 (重量%)	10 <sup>-6</sup>	10 <sup>-4</sup>	10 <sup>-3</sup>	10 <sup>-2</sup>	10 <sup>-6</sup>	10 <sup>-4</sup>	10 <sup>-3</sup>	10 <sup>-2</sup>	
アルニカ抽出物		×	×	△	毒性	27	33	52	毒性	
ケイガイ抽出物		×	×	×	×	—	—	—	55	

##### 【0018】5. 美白効果試験

【試験方法】 夏の太陽光に4時間 (1日2時間で2日) 晒された被験者40名の上腕内側部皮膚を対象とし、※40 下記に示す処方で行った。

##### (アルコール相)

95%エチルアルコール 55.0 重量%  
ポリオキシエチレン (25モル) 硬化ヒマシ油エーテル 2.0  
酸化防止剤・防腐剤 適量  
香料 適量  
薬用 (表2記載)

##### (水相)

グリセリン 5.0  
ヘキサメタリン酸ナトリウム 適量  
イオン交換水 残余

※太陽光に晒された日の5日後より各試料を朝夕1回ずつ4週間塗布した。パネルを一群8名に分けて、5群と

(4)

特開平 8-12561

5

6

<製法>水相、アルコール相をそれぞれ調製し、その後両者を混合して可溶化する。

【0019】[評価方法] 使用後の淡色化効果を下記の判定基準に基づいて判定した。

<判定基準>

◎: 被験者のうち著効および有効の示す割合が80%以上の場合

○: 被験者のうち著効および有効の示す割合が50%~80%未満の場合

\*△: 被験者のうち著効および有効の示す割合が30%~50%未満の場合

×: 被験者のうち著効および有効の示す割合が30%未満の場合

【0020】上記試験法記載の配合組成からなる試料を調製し、表2記載の薬剤を用いて美白効果を比較した。結果は表2に示す。

【0021】

【表2】

薬 剤	配合量 (重量%)	効 果
無添加	—	×
ハイドロキノン	1.0	△
アルニカ抽出物	0.1	○
アルニカ抽出物	1.0	○
アルニカ抽出物	10.0	◎

【0022】なお、表2のアルニカ抽出物は、アルニカ (Arnica) の全草をエタノール中で加熱還元した後、濾過、濃縮乾燥して得たものである。

【0023】表2より明らかな様に、太陽光に晒された後の効果はアルニカ抽出物を添加した方が過剰のメラニン色素の沈着を防ぎ、色黒になることを予防することが認められた。

【0024】実施例1 クリーム

(処方)

ステアリン酸	5.0	重量%
ステアリルアルコール	4.0	
イソプロピルミリステート	18.0	30
グリセリンモノステアリン酸エステル	3.0	
プロピレングリコール	10.0	※

実施例2 クリーム

(処方)

ステアリン酸	2.0	重量%
ステアリルアルコール	7.0	
水添ラノリン	2.0	
スクワラン	5.0	
2-オクタリドデシルアルコール	6.0	
ポリオキシエチレン (25モル) セチルアルコールエーテル	3.0	
グリセリンモノステアリン酸エステル	2.0	
プロピレングリコール	5.0	
アルニカエタノール抽出物	0.05	
亜硫酸水素ナトリウム	0.03	
エチルパラベン	0.3	
香料	適量	
イオン交換水	残余	

(製法) イオン交換水にプロピレングリコールを加え、加熱して70℃に保つ (水相)。他の成分を混合し加熱溶解して70℃に保つ (油相)。水相に油相を加え予備

※アルニカメタノール抽出物 0.01

苛性カリ 0.2

亜硫酸水素ナトリウム 0.01

防腐剤 適量

香料 適量

イオン交換水 残余

(製法) イオン交換水にプロピレングリコールとアルニカメタノール抽出物と苛性カリを加え溶解し、加熱して70℃に保つ (水相)。他の成分を混合し加熱溶解して70℃に保つ (油相)。水相に油相を徐々に加え、全部加え終わってからしばらくその温度に保ち反応を起こさせる。その後、ホモキサーで均一に乳化し、よくかきまぜながら30℃まで冷却する。

【0025】

乳化を行い、ホモキサーで均一に乳化した後、よくかきまぜながら30℃まで冷却する。

【0026】

(5)

特開平8-12561

7

8

## 実施例3 クリーム

(処方)

固形パラフィン	5.0	重量%
ミツロウ	10.0	
ワセリン	15.0	
流動パラフィン	41.0	
グリセリンモノステアリン酸エステル	2.0	
ポリオキシエチレン (20モル) ソルビタンモノラウリン酸エステル	2.0	
石けん粉末	0.1	
硼砂	0.2	
アルニカアセトン抽出物	0.05	
アルニカエタノール抽出物	0.05	
亜硫酸水素ナトリウム	0.03	
エチルパラベン	0.3	
香料	適量	
イオン交換水	残余	

(製法) イオン交換水に石けん粉末と硼砂を加え、加熱溶解して70℃に保つ(水相)。他の成分を混合し加熱融解して70℃に保つ(油相)。水相に油相をかきまぜながら徐々に加え反応を行う。反応終了後、ホモミキサ\*20

\*一で均一に乳化し、乳化後よくかきまぜながら30℃まで冷却する。  
【0027】

## 実施例4 乳液

(処方)

ステアリン酸	2.5	重量%
セチルアルコール	1.5	
ワセリン	5.0	
流動パラフィン	10.0	
ポリオキシエチレン (10モル) モノオレイン酸エステル	2.0	
ポリエチレングリコール1500	3.0	
トリエタノールアミン	1.0	
カルボキシビニルポリマー	0.05	
(商品名: カーボポール941, B.F. Goodrich Chemical company)		
アルニカ酢酸エチルエステル抽出物	0.01	
亜硫酸水素ナトリウム	0.01	
エチルパラベン	0.3	
香料	適量	
イオン交換水	残余	

(製法) 少量のイオン交換水にカルボキシビニルポリマーを溶解する(A相)。残りのイオン交換水にポリエチレングリコール1500とトリエタノールアミンを加え、加熱溶解して70℃に保つ(水相)。他の成分を混

※合し加熱融解して70℃に保つ(油相)。水相に油相を加え予備乳化を行い、A相を加えホモミキサーで均一乳化し、乳化後よくかきまぜながら30℃まで冷却する。  
【0028】

## 実施例5 乳液

(処方)

マイクロクリスタリンワックス	1.0	重量%
硬ロウ	2.0	
ラノリン	20.0	
流動パラフィン	10.0	
スクワラン	5.0	
ソルビタンセスキオレイン酸エステル	4.0	
ポリオキシエチレン (20モル) ソルビタンモノオレイン酸エステル	1.0	
プロピレングリコール	7.0	

(6)

特開平 8-12561

9

10

アルニカアセトン抽出物	10.0
亜硫酸水素ナトリウム	0.01
エチルパラベン	0.3
香料	適量
イオン交換水	残余

(製法) イオン交換水にプロピレングリコールを加え、加熱して70℃に保つ(水相)。他の成分を混合し、加熱融解して70℃に保つ(油相)。油相をかきまぜながら\*

※これに水相を徐々に加え、ホモミキサーで均一に乳化する。乳化後よくかきまぜながら30℃まで冷却する。  
【0029】

## 実施例6 ゼリー

(処方)

95%エチルアルコール	10.0	重量%
ジプロピレングリコール	15.0	
ポリオキシエチレン (50モル) オレイルアルコールエーテル	2.0	
カルボキシビニルポリマー	1.0	
(商品名: カーボポール940, B.F. Goodrich Chemical company)		
苛性ソーダ	0.15	
L-アルギニン	0.1	
アルニカ50%エタノール水溶液抽出物	7.0	
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノンスルホン酸ナトリウム	0.05	
エチレンジアミンテトラアセテート・3ナトリウム・2水	0.05	
メチルパラベン	0.2	
香料	適量	
イオン交換水	残余	

(製法) イオン交換水にカーボポール940を均一に溶解し、一方、95%エタノールにアルニカ50%エタノール水溶液抽出物、ポリオキシエチレン (50モル) オレイルアルコールエーテルを溶解し、水相に添加する。※

※次いで、その他の成分を加えたのち苛性ソーダ、L-アルギニンで中和させ増粘する。  
【0030】

## 実施例7 美容液

(処方)

(A相)

エチルアルコール (95%)	10.0	重量%
ポリオキシエチレン (20モル) オクチルドデカノール	1.0	
バントテニールエチルエーテル	0.1	
アルニカメタノール抽出物	1.5	
メチルパラベン	0.15	

(B相)

水酸化カリウム	0.1
---------	-----

(C相)

グリセリン	5.0
ジプロピレングリコール	10.0
亜硫酸水素ナトリウム	0.03
カルボキシビニルポリマー	0.2

(商品名: カーボポール940, B.F. Goodrich Chemical company)

精製水

残余

(製法) A相、C相をそれぞれ均一に溶解し、C相にA相を加えて可溶化する。次いでB相を加えたのち充填を行う。

ジプロピレングリコール	5.0	重量%
ポリオキシエチレン (60モル) 硬化ヒマシ油	5.0	
(B相)		

## 【0031】 実施例8 バック

(処方)

(A相)

アルニカメタノール抽出物	0.01
オリーブ油	5.0
50 酢酸トコフェロール	0.2

11		(7)	12		特開平8-12561
エチルパラベン	0.2		*亜鉛華	7.0	
香料	0.2		二酸化チタン	3.8	
(C相)			黄色酸化鉄	2.9	
亜硫酸水素ナトリウム	0.03		黒色酸化鉄	0.2	
ポリビニルアルコール	13.0		スクワラン	8.0	
(ケン化度90、重合度2,000)			イソステアリン酸	4.0	
エタノール	7.0		モノオレイン酸POEソルビタン	3.0	
精製水	残余		オクタン酸イソセチル	2.0	
(製法) A相、B相、C相をそれぞれ均一に溶解し、A相にB相を加えて可溶化する。次いでこれをC相に加え、		10	アルニカエタノール抽出物	1.0	
たのち充填を行う。			防腐剤	適量	
【0032】実施例9 固形ファンデーション			香料	適量	
(処方)			(製法) タルク〜黒色酸化鉄の粉末成分をブレンダーで十分混合し、これにスクワラン〜オクタン酸イソセチルの油性成分、アルニカエタノール抽出物、防腐剤、香料を加え良く混練した後、容器に充填、成型する。		
タルク	43.1 重量%		【0033】		
カオリン	15.0				
セリサイト	10.0 *				
実施例10 乳化型ファンデーション (クリームタイプ)					
(処方)					
(粉体部)					
二酸化チタン	10.3 重量%				
セリサイト	5.4				
カオリン	3.0				
黄色酸化鉄	0.8				
ベンガラ	0.3				
黒色酸化鉄	0.2				
(油相)					
デカメチルシクロペンタシロキサン	11.5				
流動パラフィン	4.5				
ポリオキシエチレン変性ジメチルポリシロキサン	4.0				
(水相)					
精製水	50.0				
1,3-ブチレングルコール	4.5				
アルニカエタノール抽出物	1.5				
ソルビタンセスキオレイン酸エステル	3.0				
防腐剤	適量				
香料	適量				
(製法) 水相を加熱攪拌後、十分に混合粉碎した粉体部を添加してホモミキサー処理する。更に加熱混合した油相を加えてホモミキサー処理した後、攪拌しながら香料を添加して室温まで冷却する。		40			
【0034】			※		
			※		

フロントページの続き

(72)発明者 長沼 雅子  
神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂第一リサーチセンター内

(72)発明者 福田 寛  
神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂第一リサーチセンター内



**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning  
Operations and is not part of the Official Record**

**BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- ☐ BLACK BORDERS
- ☐ IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- ☐ FADED TEXT OR DRAWING
- ☐ BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING
- ☐ SKEWED/SLANTED IMAGES
- ☒ COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS
- ☒ GRAY SCALE DOCUMENTS
- ☒ LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT
- ☐ REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY
- ☐ OTHER: \_\_\_\_\_

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.**